

滋賀県水平社100年における取組

4月18日(木)、19日(金)

滋賀県水平社創立100周年記念事業

滋賀県婦人会館(近江八幡市)



基調講演



記念講演



特別講演

全国水平社創立の二年後の1924年(大正13年)4月18日、滋賀県水

平社・宝ノ木水平社が嚴

浄寺(甲賀市甲南町)で

創立しました。100年

目を迎える2024年4

月18日、19日、しが部落

史研究会により記念事業

が開催され、約80人が参

加しました。

一日目は、滋賀県水平

社についての基調講演、

記念講演、特別講演、二

日目は地域史作成のため

の手法と視点、各地域からの資料調査についての報告がありました。

基調講演を行った武田一夫さん(郷土史家)

は、ふとした時に聞いた地域の高齢者の思い

出話から滋賀県水平社、宝木水平社が存在し

たことを知り、調べるようになったこと、水

平社が地域で忘れられていた存在になったの

は、差別の厳しさと公権力や右翼勢力の運動

への介入があったほか、滋賀県水平社は南梅

吉の影響を強く受けていたため、全国水平社

内の対立により南が離脱した後は歴史の評価

から外れてしまったこと等があるのではないか、

しかし、今、差別に憤り闘った人々を歴史と

して見直す必要があると話しました。

朝治武さん(大阪人権博物館長・全国部落

史研究会代表)は、近代の政治・経済の状況

と滋賀県内の被差別部落と差別の実態、社

会運動の変遷、滋賀県水平社(地方水平社)

の結成過程、滋賀県水平社創立メンバーが

1930年代には姿を消していること、30年

代に犬上郡で起こった差別事件に取り組んだ

水平社の活動家が戦後の部落解放運動に連な

る人になったことなど、県内の融和運動と水

平社運動の歴史について記念講演を行いました。

特別講演では、早川紀久子さん(滋賀県人

権教育推進協議会副会長)が、ご自身の父で

朝鮮半島に出自を持つ朝野温知さん(僧侶・

元部落解放同盟滋賀県連合会副会長)が国同

士の国際関係に翻弄される中で水平社運動と

部落解放運動に尽力したこと、また早川さん

自身も差別に遭いながらも部落解放運動に力

づけられたことについて話しました。

二日目は、研究者から地域史調査のための

参考資料や手法、視点の紹介、県内各地域か

ら資料調査の現況報告が行われ、全日程が終

了しました。

滋賀県水平社について

武田一夫さんに話を伺いました。

滋賀県内でも水平社は創立されています。県内初の水平社は「滋賀県水平社」と「宝木水平社」であり、1924年4月18日に甲賀郡寺庄村（現甲賀市）の厳浄寺で結成されました。

当時の大阪朝日新聞京都附録では、「（省略）堂々大人に交じって可憐な少女増田久恵（13）さんは朱唇に力と熱を籠め、自己が小学校で受けた差別待遇の体験を語り、如何に人間性の尊厳を冒瀆する差別が至純なる処女の魂を傷つけたかを一語は一語より強く叫び満場の共鳴を呼び、さらに谷口秀太郎（15）少年も（省略）」と紹介しています。大人と同様に子どもたちも部落差別という不合理な差別と闘っていたことがわかります。



武田一夫さん

武田一夫さんは、滋賀にまつわる水平社について造詣の深い一人です。滋賀の水平社を調べるきっかけは、歴史は掘り起こさなければ忘れられてしまう

という危機感からです。先に紹介した新聞記事も、武田さんが収集した資料であり、武田さんは、地元の宝木水平社だけではなく、坂田郡（長浜）、犬上（彦根）、豊郷、甲良など現地に赴いたり、資料を調べたりして情報を収集されています。今回、武田さんに滋賀県水平社にまつわるこれまでとこれからの人権啓発について尋ねました。

Q 滋賀県水平社をわかりやすく教えてください。

A 滋賀の水平社について、子どもたちにもわかりやすく啓発をしようと工夫したものがあります。滋賀県水平社と宝木水平社が創立されるまでの闘いを実話にもとづき山元俊彦さんと監修をして物語にしました。それを「こうかちいきの昔ばなし——人権啓発講演会——」で実演するのに、「まんが日本昔ばなし」の語りと人物の声を担当した常田富士男さんに語っていただきました。滋賀県水平社についてはこれを一読してもらうとわかりやすいと思います。

『ひとびととの闘い（甲南地域）』

苦しかったけど、胸張って生きてきたひとびとの話をしよう。

この村はな、室町の頃、新田の開発に近くの村々からやってきた次男や三男によって開かれたんじや。ところが、川べりであつたためにな、せつかく作つた農地も大水のたびに流されてしまった。そして、貧しさと方々から集まつて来た外者が住んでいる所というだけで、いわれない差別までがやつてきたんじや。

江戸に幕府がひらかれた時代じやが、古老の話では、この村はな、東海道などで荷物を運ぶ仕事などをして暮らしておつたそうじやが、次第に住んでおる人も増えていった。みんなは、親鸞さまの教えを大切にしながら生きてきたそうじや。だけどな、差別は厳しく、こんなことを古老が話しておつた。藩の役人が・「家を建てるのに釘を使つていないか、瓦を使つていないか」・などを調べに来おつた。

また・「隣の村を下駄を履いて通るな、傘を差して通るな」などというような約束事があつたという話なんじや。

それはあんまりじゃないかと、みんな怒りを胸に生きてきたそうじゃ。

明治の世になって、「解放令」というのが出されたんじや。

村の人々は、これで差別がなくなると喜んだ。

でもな、そうはいかなんだんじや。仕事は奪われるし、生活は苦しく、差別はいつそう厳しくなるばかりじゃった。それでもこの村の人たちは、小さな村じゃったけど自分たちで誇りを持って生きていくと、分村、独立して宝木村をつくった。

自主・自立の精神が強かったんじやな。

また、この頃は村の神社を作ったり、水口城の角やぐらを買い、総出で運んで厳浄寺（ごんじやうじ）というお寺の本堂を建てたり、それはもう村のみんなの頑張りは大変なもんじやった。身分差別の厳しかった封建時代のシンボルであった水口城の角やぐらが、後の「水平社」結成、すなわち部落差別を無くす運動の場所となったのは、何とも皮肉なことやなあ…。

あつそうや、差別といえどこんな話があつた。「近くの店に買い物に行くとな、お金は直接受け取ってもらえず、ザルで受け取って洗われた。」など、いっぱいあつたと聞いておる…。

そのような暗闇の中、どうにか生活しているという状況だったが、人間としての生き方を求める力は涸れずにあつたんじやな。

これは有名な話やが、1922年3月3日、京都の岡崎公会堂で全国水平社の創立大会が開かれたんじや。全国の被差別部落の仲間が3000人も集まり、自主的な解放をめざす「全

国水平社」が生まれたのじやった。

今日ここにきてくださったみなさんは、「人の世に熟あれ、人間に光あれ」という言葉を知っておられるかな。日本の人権宣言と言われている「水平社宣言」は、この時、満場の嵐のような拍手の中で生まれたんじや。

ところが、当時この大会に参加するのは大変な苦勞があつたそうじや。だけどな、宝木の青年が8名も参加していたんじや。今はもう亡くなられているが、その大会に参加した一人は、当時のことを・・・「会場の内外には、大勢の警官がいたが、集まった連中はみな命がけの覚悟をしておったから、警官何者ぞといった気迫がみなぎっておつた。あの時のわしの気持ちには・・・わしの生涯の最高のなんとかやなあ・・・、一口にどうとは簡単に言えへんわ・・・と話してくれただのが忘れられん・・・。まさしくその人にとっては、その日が、厳しい差別に立ち向かう道筋がくつきりと見えた「よき日」であつたんじやろな。

その後、全国水平社大会に参加した8人を中心に、心をひとつにして、「滋賀県水平社」と「宝木水平社」の創立に向けての闘いがはじまったのじやった。さまざまな嫌がらせや、公権力の弾圧があつたが、困難を乗り越え、やっと1924年4月18日、滋賀県水平社と宝木水平社の創立大会が開かれた。

宝木では、この大会に向けて、他の村に知らせるビラを張ったり、村中で会場となった厳浄寺の本堂を架けだして広げたり、本当に大変な努力をしたそうや。それでもやり通せたのは、

差別を無くしたいという強い思いが支えたんじやろな。

「人間よ 自然の平等にかえれ 少年少女の火の如き叫び滋賀県水平社の光景」と、大阪朝日新聞社が伝えたそうじや。

その後、宝木水平社は、甲賀の地域で部落解放の先頭にたつて闘ったそうじやが、戦争に向かつていった時代の流れに飲み込まれてしまった。しかしなあ、この「水平社」の精神は、戦後の差別を無くす活動にしっかりと引き継がれ、今も生き続けているんじや。

水平社の歴史が、胸張って語られ、まちづくりが進められたとき、すべての差別のない、みんなが住みよい社会になると、わしは思うんじやが・・・。

こうがちいきの昔ばなし
——人権啓発講演会——

「まんが日本昔ばなし」の声でおなじみの
常田富士男さんが鹿深の地にやってくる

2月4日金 7時から 忍の里プラザ

講演 常田富士男さん
入場無料

主催 滋賀県人権啓発委員会

お問い合わせ 05-4020-XXXX

こうがちいきの昔ばなし チラシ

武田さんは物語を監修するにあたって、できるだけ相手に伝わりやすいものにするようにと考えたそうです。これにより、地元の人々となる水平社のことを知ってもらおう一つのきっかけになったと振り返ります。この物語

を読むと、当時の被差別の人々が結集して立ち上がった様子が手に取るようにわかります。今回、これはぜひとも紹介したいと山元さんと武田さんをお願いして原稿を掲載させてもらいました。

武田さん自身も高齢となった今、滋賀県水平社について、地元の方が地元の情報を集積してほしいと話されます。それは、「忘れ去られている事実がその地の新たな歴史となるから」と語ってくれました。

Q) 武田さんの滋賀県水平社に対する思いを聞かせてください

A) この地に水平社が創立された歴史的事実を「甲賀市史」と「宝木の歴史」にきちんと位置付けられました。

出身地を隠して暮らしている人の中には、地域名が表に出ることを恐れる人もいます。ある人から、「滋賀県水平社を表に出すことで複雑な思いを持つ人もいる。その人たちがどのような思いをするか、その方たちに向き合う覚悟はあるのか」と問われたことがあります。私も悩み、随分と考えました。しかし、部落差別を解決するために必要なことは、「滋賀県水平社が堂々と語れる社会にすること」が大事ということでした。胸を張って暮らせる社会にするためにも、滋賀県水平社のことを語っていくことが必要だと思えます。

Q) そもそも武田さんが人権啓発に携わるようになったのはなぜですか？

A) 30数年前、親しい人が結婚差別により辛い経験をしているのを目の当たりにしました。その時に「こんな差別はなくしていいかなあかん！」と痛感したのです。それから、まずは、地元で差別解消の取組をしようと思いました。部落差別問題を学ぶと、様々な人権課題が見えてきます。それから、部落差別問題をはじめとするさまざまな人権啓発をするようになりました。

Q) 水平社創立から100年が経ちますが、先人たちの思いは引き継がれていると思いますか？

A) 部落解放運動を中心に行政や教育が共に啓発をし、差別をなくしていこうという意志は多くの方に引き継がれていると思います。2016年12月には「部落差別解消推進法」も施行され、啓発の後押しとなっています。ただ、宣言の結びにある「人の世に熱あれ、人間に光あれ」というすべての人があらゆる差別を受けることなく、自分らしく暮らせる社会にはまだなっていません。私は、差別がある社会の現状を真摯に受け止め、差別がある限り生涯にわたって差別解消の取組を続けたいと思っています。

Q) 部落差別解消に向けての思いを聞かせてください。

A) もともと町役場の職員で、人権啓発に長

く携わってきました。しかし、自分の生活の中で当事者になってはじめて、きれいごとだけでは人権は語れないということが分かりました。例えば、介護の問題では、私の足かけ9年間の両親の在宅介護から、介護する側の人権も大事だということに気が付きました。このことをわざわざにしているのは、要介護者にとつてのよりよい介護につながらない。また、当事者の「声」を聴くことも重要です。私が民生委員の時、障がいがある子の親から、「この子を置いて死ねへんねん」という切実な声を聞きました。このことから、困っている方々の「声」を施策に反映することが差別解消の糸口につながると思いました。また、どの人権課題もベースにある課題は共通していることから、単独で取り組むのではなくスクラムを組むこと、継続することが大切です。私の人権の取組は「まだまだ、これからや！命が尽きるまで！」と思っています。

武田さんの言葉の一つ一つには力強さがあり、心に強く響くものがありました。

滋賀の水平社を学び、地元の歴史を学ぶことの大切さを改めて感じました。水平社創立100周年を機にぜひとも水平社について学んでいただきたいと思います。何から手を付ければいいかわからないという方は、紙面にも紹介した「こうかちいきの昔ばなし」を読み直したり、「宝木の歴史」「甲賀の市史」を手にとってみたりしてはいかがでしょうか。また新たな学びがあると思います。

宝木水平社
1924年（大正13年）4月18日に滋賀県水平社と宝木水平社が創立しました。宝木水平社は県内では初めての地域の水平社でした。この旧甲賀郡（現在の甲賀市）での動きに続き、同年に千草水平社、1926年に犬上水平社が結成されました。

全国水平社を創立した人々には、資力や教育力があつたことはよく知られています。宝木にも地域に教育力があつたようです。地域の歴史を調べておられる武田一夫さんによれば、宝木には福森松蔵さんという教育者がいて、地域の教育や生活改善に取り組んでいたそうです。

福森松蔵さん

福森さんは三重県阿山村（現在の伊賀市）

滋賀県の部落解放の先駆者

第3回

ふくもり
福森しょうぞう
松蔵さん

寺庄尋常小学校教員

で生まれました。1909年（明治42年）に寺庄尋常小学校訓導※として赴任されました。福森さんは1912年（大正元年）に木下幸太郎さん（後の宝木水平社委員長）の離れ座敷に居住することになりました。宝木に移ってから、昼は学校で教えて夜は住民と話し合いをしたり、地区の社会教育や家庭教育に取り組みだりました。

福森松蔵さんの活動

福森さんのことは文字の記録ではなく、古老が地域の青年や子どもたちに語り継いだ形として残っています。哲学を学んでいた福森さんは、「同じ人間でありながら差別があるのは許し難い。日本に厳存する差別観を完全に解消すべき」と訴えながら、地域のために力を注ぎました。

地区内の青年や女性に対して勉強の必要性を説きつつ、識字教育を組織化して実施し次世代の育成にあたりました。また、農作物の栽培方法を教え、作物を販売して収益金の積立を行う仕組みを作りました。貯蓄の大切さを実践によって伝える方法は、宝木の生活設計に大きな影響を与えたそうです。

これらの活動は1912年に滋賀県教育会によって、また1920年には県知事の堀田義次郎によって表彰されています。

表彰状

甲賀郡寺庄小学校 福森 松蔵
一視平等ノ聖旨ヲ奉体シ 部落指導子弟教養ノコトニ
任シ 成績見ルベキモノアル
依ッテ茲ニ奨励金五十四円ヲ授与シ 益々努力ヲ望ム
大正九年二月十一日
滋賀県知事正五位勲四等 堀田義次郎

県知事から贈られた
表彰状

地域に残したもの

福森さんは結婚のため三重県に帰ることにありますが、教え子との交流は戦後も続き、1954年にはかつての生徒が寺庄小学校で謝恩喜寿祝賀会を開いています。

滋賀県が同和対策として識字教育を行おうとした時、宝木はほとんどの人が読み書きできて極端に少なかったという結果が出ました。福森さんが蒔いた種が数十年後に実を結んだといえます。

福森さんが実践した教育と福祉の取組には人を尊重する理念が根底にありました。人権を中心に置いた活動が人を勇気づけてその人がもともと持つ力を発揮させ、そうした取組が宝木水平社創立に繋がっていったことを示しています。



謝恩喜寿祝賀会・福森さんは前列中央の和服姿

※訓導……旧制小学校の正規の免状を持つ教員。

写真提供 宝木区史編集委員会

参考資料

『寶木の歴史』宝木区史編集委員会 2000年
武田一夫「忘れられていた水平社 滋賀県水平社の闘い」『部落解放研究』第46回全国集会報告書

674号 2013年